

わが国におけるキーツ受容

——讀賣新聞の分析を中心に——

齋 藤 晴 恵

〈Abstract〉While opening up the country in 1854, the Japanese government aggressively accepted Western culture and technology. Not only the western political system, technology, education but English literature was also introduced this period. The Introduction of the western typography, letterpress printing machine, paper making industry accelerated the rapid progress in diffusion of newspapers, magazines and publishing trade in Japan. This paper surveyed the process of the reception of the English poetry, John Keats, from Meiji era to Heisei era. Preceding studies have suggested that Keats was late to become popular among a general audience. As the number of the translation of Keats's was small, it is invalid to compare the number of the translation or the poetry books among other English romantic poets. Preceding studies have showed the title of Keats's translation or the inspired poets by Keats arbitrarily. The quoted magazines were not targeted for the general public as their readers. This paper analyzed the YOMIURI SHIMBUN, the largest daily national newspaper started in 1874, from the first issue (1874) to May in 2012.

The summary of the findings are:

Reception of Keats in Meiji Era ① Keats influenced the Japanese poets on the process to establish "SHINTAISHI", especially to Kyukin Susukida, who published *Botekishu*, and was critically praised as the best work in the second period of "SHINTAISHI", *Nijugogenn*. ② "SHINTAISHI" reached full bloom in 1905. The first poetry book of Keats, "*Keats no Shi*" was translated by Katai Tayama in 1905.

Reception of Keats in Taisho Era ① The centenary after Keats' death was celebrated in 1921. Special issues on Keats was published by the magazines, *Eigo Seinen* and *Bokushin*. Special articles were on the newspapers. ② The first academic study on Keats, *Keats no Geijutsu*, was published by Kiyoshi Sato in 1924. ③ The self image of Keats was established as a poet, die of tuberculosis, premature mortality, impossible love with Fanny Brawn. ④ The English programs on radio was started and the English poetry was taught on radio.

Reception of Keats before WW2 ① Overseas news on literary world: the movement of the Keats's grave, The Play featured Keats, The death of Bridges who was the author on Keats. ② The research on foreign literature became refined by country and period.

Reception of Keats after WW2 ① The start of the translated foreign poem boom. They started to use the recorded materials of English poetry. ② Yasuo Deguchi accomplished the

translation of Keats' all works in the Japanese history and published in 1974. ③ The Keats' letter to his love, Fanny was the highest price ever for an letter in the world. ④ The Play featured Keats. ⑤ Biography on Keats, *John Keats*, written by Walter Bate, won the Pulitzer Prize winning. ⑥ The book review told the role of Keats' works in the United States by mentioning the success story by the Jewish immigrant.

Reception of Keats in Heisei era ① Keats gained more of his understanding by the movie *Bright Star*.

はじめに

筆者は、わが国における英詩人キーツ (John Keats, 1795-1821) の受容過程を明らかにする目的で、明治期に使用された英語教科書の内容分析¹⁾ やキーツ書誌作成²⁾ を行なってきた。キーツ受容の先行研究³⁾ は、訳詩集や文芸雑誌に発表されたキーツ翻訳詩およびその影響詩を、誰が翻訳あるいは作詩し、いつ、何に発表したのかを研究するものが中心であった。しかし、キーツ訳詩集や翻訳詩の点数は他の英詩人のものと比べるとはるかに少なく、この方法からキーツの受容を完全に明らかにすることは難しいと考えられる。本稿では、新聞という情報メディアに着目し、一般の人々へのキーツ受容過程を明らかにする目的で、新聞記事本文と広告の内容分析を行なう。調査としては、明治、大正、昭和、平成に発行された読賣新聞⁴⁾ を用いた。

1. 研究方法

日本で発行された最初の新聞であるとされる英字紙 *Nagasaki Shipping List and Advertiser* (1861年6月創刊) や *The Japan Herald* (1861年11月創刊) などの居留地新聞に続き、日本初の日本語日刊紙『横濱毎日新聞』(1870年12月創刊) が創刊され、社会の出来事を迅速に、広く、人々に伝達するための情報メディアとして、明治期以降に郵便制度や鉄道制度の発達と共に新聞全国紙が普及した。これは、当然のことだが英詩研究者や詩壇の人々だけではなく、一般大衆即ち属性や背景を異にする多数の人々をその主たる読者対象としている。当時の新聞は、漢文調の文体で、政治や国家を論ずる内容の『東京日日新聞』(1872年2月創刊、1943年『毎日新聞』に統合)、『郵便報知新聞』(1872年6月創刊、1894年『報知新聞』に改題。1942年『読賣新聞』に合併)、『朝野新聞』(1874年9月創刊、1872年11月創刊の『公文通誌』を1974年に改題) などの〈大新聞〉と、町人や女性を読者対象とし、漢文調よりはやわらかい文体で、ルビを付して読みやすくする工夫が見られ、娯楽的な読み物もある『読賣新聞』(1874年11月創刊)、『東京繪入新聞』(1876年3月創刊) などの〈小新聞〉に大別される。筆者は、明治期から今日まで継続している日本の代表的な日刊の全国紙であること、明治22年には坪内逍遙が文学主筆に就任、尾崎紅葉、幸田露伴等が社員として活躍し、文学分野で異彩を放ち、文学新聞としても名を馳せていたこと、販売部数が2018年12月の時点で約828万部と現在、世界最大を誇っていること、創刊第1号から今日まで欠号なくデータベースで通覧可

能であることなどの理由から讀賣新聞に着目し、その記事と広告の内容分析を行なう。今後、稿を改めて、別の新聞についても扱い、内容分析を続けていきたいと考えている。

2. 讀賣新聞の内容分析

2.1. 明治期のキーツ受容

2.1.1. 新體詩の形成と英詩

1902年、上田敏の帝國教育會での演説が読売新聞に「英國近代の文学⁵⁾」と題して4回にわたり掲載されている。上田は、18世紀末の英詩人のコールリッジ (Samuel Taylor Coleridge, 1772-1834)、ワーズワース (William Wordsworth, 1770-1850)、テラー (John Taylor, 1580-1653)、サウジー (Robert Southey, 1774-1843)、ド・クインシー (Thomas De Quincey, 1785-1859) などの湖畔派詩人と、バイロン (George Gordon Byron, 1788-1824)、パーシー・ビッシュ・シェリー (Percy Bysshe Shelley, 1792-1822)、キーツ、リイ・ハント (Leigh Hunt, 1784-1859) などを、伊太利派詩人として本文で紹介している。キイツ／キーツについては、「キイツの詩 キイツ (1795-1821) は前途有望の詩人でありましたが、羅馬に転地して肺の為に死んだのでありますから、詩は誠に少いので、追悼のあまりに、もし此人をしてなほ活かしめば、沙翁、ミルトンと同等の詩人たるべしとまで評したほどであります。エンディミオンは中での傑作である。希臘の瓶、悲み、サイチエニ、ナイチンゲルは短歌の有名なもので、ハイペリオン、セントマアクの夕べは、斷片ながら賞美されます。」と、キーツの生涯と作品タイトルを列挙し、もしもキーツが長命なれば、シェイクスピア (William Shakespeare, 1564-1616) やミルトン (John Milton, 1608-1674) と同等の詩人になったろうとキーツを高く評価している。また、「次いでリイ・ハントであるが、是はキイツの師で、キイツを有望の士であると指摘したので有名なものである。英文學を研究するには、單にその詩文を読むといふにも、是を希臘思想と基督教思想との二つを知つて、後に志たいものであります。殊にこのキイツは希臘的思想に富んだものである。」と、上田は、シェリー、テニソン、ブラウニングとは量的にも、内容においてもキイツに破格の扱いをしている。

讀賣新聞日曜版文藝欄 (1903 - 1906年) では、翻訳詩を扱っている。水上幽波や小原要逸 (無絃) がワーズワース、シェリー、テニソン (Alfred Tennyson, 1809-1892)、コールリッジなどの英詩を翻訳しているが、日曜版文藝欄にはキーツ詩の翻訳は見られない⁶⁾。

明治38 (1905) 年1月8日付「日曜附録」の参々「詩壇私言」の中で、「可笑しなことには、今の新體詩人は、大抵ロセディ (ママ) (Christina Rossetti, 1830-1894)、キーツ、シエレー、それから近頃はポー (Edgar Allan Poe, 1809-1849) などの詩を愛唱する人が多く、それも十分に諸家の作を味うたでもないに、唯何となく人のいふまゝにロセツテイ (ママ) を好くやうになり、シエレーをすく様になり、そして其の皮相の美に感服してしまつて、其の奥底までは探らずに、表面ばかりを模倣するのが多いのであるから、其の餘弊や知るべしである。」と、明治37年頃の新體詩人にキーツ詩が読まれていたことがわかる。そして彼等の作詩した〈新體詩〉は、英詩の表面的な模倣にとどまっており、参々は、西洋作詩法、スインバン (Algernon Charles Swinburne, 1837-1909) やテニソン、ブラウニング (Robert Browning, 1812-1889) の作品や、フランス歌謡、わが国の謡曲な

どを研究することを薦めている。

孤島は、「閑是非録（新體詩の過去將來）⁷⁾」「日曜附録」欄（明治39（1906）年3月4日）で〈新體詩〉形成の枠組みをつぎのように示している。〈新體詩〉は『新體詩抄』に始まり、『新體詩抄』から『若菜集』までが第一期形成期、島崎藤村の『若菜集』で集大成され、第一期の最盛期を迎える。『若菜集』から『二十五絃』までが第二期形成期、薄田 泣 堇（1877-1945）の『二十五絃⁸⁾』で第二期の最盛期を迎える。孤島は、藤村の恋愛詩が飽きられて、晩翠の漢字やカタカナを多用した『天地有情』が歓迎されたことを指摘する。この記事から〈新體詩〉は、明治15（1882）年8月、外山正一、矢田部良吉、井上哲次郎らが「西洋ノ詩」に倣った『新體詩抄』に始まり、『新體詩抄』で、それまでの漢詩から五・七調や七・五調の新しい形式の詩形や外国詩が紹介され、明治30（1897）年、藤村の『若菜集』で完成したという従来の見方だけでは不十分であることがわかる。「新著批評」（1909年11月14日）は、「近代の英國文壇に於て最も重要な地歩を領して居るものは詩壇である。」と、当時の詩人が外国文学の中にその方向性を模索する際、その頃の英國文壇では、「詩」が盛時であり、自ずとそこで評価の高い詩人たちを研究しようとする機運があったと考えられる。参々や孤島が指摘したように、第二期〈新體詩〉形成期ではロゼッティ、キーツ、シェリー、ポーなどが研究され、中でも泣堇は、キーツ詩を究め第二期〈新體詩〉最盛期を代表する『二十五絃』を発表し、新體詩の新境地を開いたことがわかる。

また、國民英學會に英詩朗吟科を設置、青山女学院聯合文學會や日本女學校懇話会で英詩英文暗誦や英詩吟誦が行なわれ、当時は英詩教育が行なわれている⁹⁾。ここで注目したいことは、当時の英語教育では、漢詩のように英詩は声を出して詠ずることが重んじられていたことである。英詩の形式や韻律を、英詩を愛誦することを通して学んでいたものと考えられる。

2.1.2. 薄田泣堇とキーツ

明治32（1899）年12月11日付月曜附録の文藝欄に、「『暮笛集』のために」という見出しではじまる薄田泣堇が出版した『暮笛集』（金尾文淵堂、1899年）に対する星静の書評がある。これは讀賣新聞紙上で最初のキーツ関連記事であると考えられる。星と泣堇とは、「われはまた、泣堇が嘗てキーツを以て、その愛吟の第一者と為し、反復誦讀しつつありしを知る」の記述から、詩壇において近い間柄であることがわかる。星によって泣堇がキーツに心酔していたことが明らかになる。これは、泣堇のキーツ影響論において参考となるだろう。星は、「藤村、晩翠兩氏の如き、その名は切に斯壇に鳴歌せらるゝと雖も」と、藤村と晩翠が『若菜集』以降、当時の新體詩を代表する詩人であることを評価した上で、「退て思ふ、傾者、世間往々泣堇その人を誤解し、従て彼が詩に就きて、あらぬ批評を加ふるもの多し。彼果して、キーツに私淑する處ありや否や。」から、当時の詩壇の中ですでに泣堇のキーツ影響論が広まり始めていることがわかる。星は、キーツの詩は「純粹單獨に感じて作せり」という点で評価が高く、泣堇の詩も同様にキーツの詩の評価を移し換えて評価できると、泣堇を擁護する。しかし、これは決して泣堇とキーツとを同等なものとして高く評価するのではない。泣堇の詩はキーツの詩には未だはるかに遠いことを知っている。泣堇が作詩する動機とキーツのそれとが詩の趣を同じくすることを指摘するだけである。「泣堇に向ひて、爾後益々研究の歩を進むることあらんことを望み、世の『暮笛集』を讀まん人々に、先づ、泣堇が詩の『趣』を味わわんことを切望すると共に…」と泣堇の今後を鞭撻している。星の記事からも、当時の詩壇においては、

キーツ詩の評価は高かったものと考えられる。

ここで、なぜ泣菫のキーツ影響論があったのかを考えたい。泣菫は『暮笛集』の中で、キーツ詩のペトラルカ形式のソネットを取り入れて、八・六調の十四行詩を〈絶句〉として発表している。〈絶句〉以前、明治30(1897)年、島崎藤村が『若菜集』で〈新體詩〉を確立し、詩人たちは、七・五調、五・七調の〈新體詩〉の形式の中で詩作をしてきた。この〈新體詩〉の形式を打破する新奇な泣菫詩は、それまでの〈新體詩〉として受け入れられるのか、という観点から、当時の詩人たちが泣菫を異端と捉えたのではないかと考えられる。これは、〈新體詩〉の形式さえ倣えばよしとするのではなく、新しい詩の形式を希求する泣菫の詩人としての真摯な姿勢に加えて、泣菫が英詩、とりわけキーツ詩をとことん学ぶことを通して、従来の日本の詩にない新しい〈絶句〉という表現形式に到達したのである。

泣菫がキーツの影響を受けたことを詩壇が大きく取り上げていることは重要である。新しい形式の詩の表現者である泣菫の登場が、その後の多くの詩人たちに影響を与えていくことが予見できるからである。そして、坪内逍遙によるシェイクスピアの翻訳以降、英詩人への関心も増えていく中、まだその名前があまり知られていなかったキーツへの関心も増えていくのかが期待できるからである。泣菫は、キーツ詩を深く研究したからこそ、〈新體詩〉第二期の代表作品となる『二十五絃』を完成することが出来たとも考えられる。キーツの受容はロマン派の詩人の中で遅れた¹⁰⁾と、これまでキーツ受容研究では考えられてきたが、キーツ詩こそが、わが国の〈新體詩〉形成において、詩人たちを啓発してきたのではないだろうか。キーツ詩は詩人たちによって新たな詩の境地を開くために、その後研究されてゆくものと考えられる。泣菫に対してキーツからの影響を指摘する議論が多ければ多いほど、詩壇の中でキーツ詩を理解する人々が増えていることを意味していると考えられる。わが国のキーツ受容においては、泣菫の詩壇での業績が大きかったと考えられよう。

2.1.3. わが国最初のキーツ訳詩集

明治38(1905)年7月24日付「よみうり抄」欄に、「田山花袋氏(ママ)はキーツの詩を翻譯しつつあり」という記事があり、ここに硯友社の小説家、花袋の近況報告がある。ここには、同年10月、田山花袋訳『キーツの詩¹¹⁾』(博文館, 1905)の出版に向けて花袋が翻訳に集中していること、当時の詩壇の花袋訳キーツ訳詩集出版への期待が窺える。英詩人キーツについては、中村正直(号:敬宇、^{なかつむらまさなお}1832-1891)訳『西國立志篇』や平田禿木(本名:喜一郎、1873-1943)の「薄命記」による詩人の紹介をはじめ、当時の人々は、キーツ翻訳詩の雑誌掲載などから、キーツという英詩人の名とその作品の一部を知るのみであった。そこで、わが国初のキーツ訳詩集の出版が待ち望まれていたと考えられる。わが国初のキーツ翻訳詩集である田山花袋訳『キーツの詩』については、『明星』、『白百合』などの当時の文芸雑誌では、書評欄での田山花袋の翻訳について支持派と反対派とが二分し批評合戦があったのだが、『キーツの詩』執筆についての近況報告を紙面に掲載した讀賣新聞紙面においては、出版後の書評や、田山花袋訳への批評などは見られない。これは、当時の文芸欄担当者たちと花袋との関係について今後調査をしていくことで、新聞メディアとしての中立の立場を貫いたからであるのか、あるいは花袋の文壇上の地位の高さからなのか、など新たな発見を導いていきたいと考えている。

2.1.4. 英詩人キーツ像 1. 結核詩人

青山霞邨^{アオヤマ カ ソン} (1874-1940)「詩論數則」(明治44 (1911) 年2月5日)は、「李賀^{り が} (Li He, 791-817) や元^{げん}政^{せい} (1623-1668) や山陽^{さんやう} (頼山陽, 1780-1832) やキーツ、ブロンテー (Anne Brontë, 1820-1849)、ホワイト (Richard White, 1821-1885)、ウルフ (Charles Wolfe, 1791-1823) 等肺病詩人は擇山ゐる。」と、キーツを肺病詩人に一括りしている。ここからキーツが25歳の若さで肺結核を病み、転地療法で訪れたローマで客死した詩人であることが当時すでに、周知であったことが窺える。記事の内容は、青山が、詩と散文とは区別されるものであり、詩の韻律が重要であることを論じた。この青山の論に対して、服部嘉香^{はっとりよし か}が詩のリズムと呼吸との関係を取り上げて、「肺病家の詩は呼吸しよう々とする努力の結果、自然と詩句が長くなるといつたが果して事実であらうか。」と記事の中で反論したものである。青山は、模倣、踏襲、剽窃は常に起こる問題であるとした上で、「泣蕙氏の詩句とキーツ、シエレー (ママ) の詩句」との同似を示して暗合と踏襲との区別し難いことを指摘する。ここでも泣蕙のキーツ影響論が論じられている。

2.2. 大正期のキーツ受容

2.2.1. キーツ百年記念祭

キーツは、1821年2月23日肺結核の転地療養で訪れたローマで客死した。わが国においても、英詩人キーツの死後100年を記念する行事が大正10 (1921) 年に行なわれている。キーツ記念行事に関する新聞記事をここに紹介する。

■「ジョン・キーツと日蓮^{にちれんしょうにん}上人 [1222-1282] と¹²⁾」(1921年2月6日)「讀書界と出版界」欄

当時多数出版されていたワイルド翻訳本に対して、この年はキーツ百年祭という特別な節目であるにもかかわらず、この時機にキーツ詩集が新たに出版されることはなかった。要約すると、「その生涯が薄倖の詩人にとって、大正の出版界までも薄倖であった」という記事の内容に対し、どれだけワイルドの翻訳出版がこの年にあったのだろうか。キーツ百年記念祭の前年にあたる大正9 (1920) 年、矢口達編『ワイルド全集全5巻』(天佑社)、大正10 (1921) 年、若月紫蘭訳『サロメ』(極光社)、翌大正11 (1922) 年、内藤濯、宮原晃一郎訳『サロメ』(白水社)、日夏耿之介訳『ワイルド詩集』(新潮社) が出版されている。ワイルド翻訳の出版点数は各年でみると左程多くはない。キーツについては、百年記念祭に至るとも全集に匹敵する全訳詩集や書簡集の出版がみられないことは事実である。前述の田山花袋訳『キーツの詩』が本邦初のキーツ訳詩集であり、それに続く訳詩集は、大正15 (1926) 年の渡辺正知訳『キーツ詩集』(聚英閣) の出版を待つことになる。出版年から明らかのように、この渡辺正知訳はキーツ百年祭を機に出版されたものではない。わが国におけるキーツ全訳詩集は、出口保夫訳『キーツ全詩集全4巻』(白鳳社、1974) が最初である。注目すべきことは、キーツ百年記念祭が開催された大正10年頃すでに、キーツの名声が高かったのに対し、キーツの訳詩集の刊行が極めて少ないことを指摘する声があったことである。文藝欄ではつぎのように『英語青年』と『牧神』のキーツ特集を紹介している。語学雑誌の元老株『英語青年』には岡倉由三郎「ラ・ベル・ダーム・サン・メルシ譯」、厨川白村「オード・オン・エ・グレシアン・アーン譯」、斎藤勇「キーツ研究書目」、竹友藻風「キーツ解説」が掲載されている。一方、斎藤勇、伊藤白蓮、服部嘉香、野口雨情、山田耕作、藤森秀夫、近衛直麿、三木露風らを同人とする牧神會発行の『牧神』二月号は『キーツ

ツ記念號』としてキーツ自筆原稿の写真や評伝、訳詩を掲載し、キーツ研究資料としても貴重である。

■「キーツ百年記念會¹³⁾」(1921年2月22日) 文藝欄「よみうり抄」

キーツが百年前に亡くなったと同じ日、2月23日にわが国ではキーツ記念百年記念會が帝國大學構内の山上御殿で開催されていることを伝える記事が掲載されている。山上御殿とは、旧加賀藩育徳園心字池(三四郎池)の傍に移築されていた江戸時代の建造物で、当時は会議室としても使用されていた¹⁴⁾。記事にあるように、百年祭の講演題目は、「キーツの頌歌に就て」(土居光知, 1886-1979)「キーツ作聖マコ祭前夜」(齋藤勇^{さいとうたけし})「キーツに寄する自作ソネットの朗讀」(豊田實^{とよだみのる}, 1885-1972)である。当時のキーツ研究者として齋藤勇、土居光知、豊田實らが名を連ねており、百年祭の内容は、キーツ詩の解説、作品研究、献詩である。讀賣新聞文藝欄には、キーツ研究の第一人者齋藤勇¹⁵⁾の記念記事をつぎのように掲載している。

■齋藤勇「キーツ逝いて一百年／けふ羅馬で死んだのだ¹⁶⁾」(1921年2月23日) 齋藤勇は、苦痛と葛藤との中に現れる眞の美、高級の美を体験した読者のみが、キーツの詩を眞に鑑賞し、愛好することが可能であることから、キーツの愛読者、理解者が限定されるのは当然であると言う。

ここでキーツの受容と比較するために、キーツと同じくイギリスを代表するロマン派詩人としてシェリーの場合について考えてみる。シェリーは、1822年7月8日、イタリアで溺死した。キーツ百年祭の翌年(1922年)7月がシェリーの没後百年にあたる。キーツと同様にシェリーの没後百年祭がわが国でも開催されたのかを調査すると、讀賣新聞紙上にも、シエレー百年忌の記事がみられるが、「よみうり抄」欄(1922年6月23日)に「シェリー百年祭¹⁷⁾」の『詩聖』が全誌をシェリー研究号とすることを伝える記事と、齋藤勇の「シエレー百年忌¹⁸⁾」(1922年7月10日)と題する詩の2件のみである。前年のキーツ百年記念祭と比較すると、その扱い方は大変小さいものである。このことから、これまでキーツが他のロマン派詩人のようには日本人に受容されなかったと言われてきたが、決してそうではなく、キーツも大正時代において、新聞全国紙でも大きく扱われるように受容されていたと考えられる。むしろキーツはイギリスロマン派詩人としては盛大にわが国において死後百年祭を祝されたかと考えることが妥当であろう。

2.2.2. わが国最初のキーツ研究書

「英文學研究別冊第三キーツの藝術¹⁹⁾」(1924年7月10日)「広告欄」に、「佐藤清先生著(再版出来)／愛蘭文學研究／・英文學研究別冊第一・價一圓七十錢」、「帝大文學部英文學會編／シエリ研究／・英文學研究別冊第二・價一圓五十錢」と、東京帝大英文學研究別冊シリーズが研究社から刊行されている。アイルランド研究、シェリー研究、キーツ研究とシリーズである。大正末にわが国初のキーツ研究書が出版されたことの意義は大きい。前年3月、『シェリ研究』の新刊広告²⁰⁾には、「英文學研究者の書齋に藏せらるべき好著である」と、読者対象を英文学研究者向けとしている。

2.2.3. 海外文藝消息

1917年11月3日、キーツの伝記の出版記事、キーツ傳 倫敦のマクミラン會社から Sir Sidney Colvin 氏作“The Life of Keats”が発行された。キーツの評傳として最も完備せるもの。著者はキーツ通の作家として知られたる人にして、既に English Men of Letters Series 中の“Keats”(キーツの傳及其作を批評したるもの、定價一志) 其他の著述あれども皆本書の浩なるに及ばず、キーツの詩

を愛誦して其人を偲ぶ者は何人も本書を見逃し得ぬであらう。菊判布製定價十五志。」から、わが国のキーツ読者の独特のキーツ観が「キーツの詩を愛誦して其人を偲ぶ者」と表現されており、キーツ詩そのものだけでなく、詩の背後にあるキーツの薄倖の短い人生をも想像しながら詩を愛誦することが、他の詩人にはみられないことだろう。また、この記事の筆者は、キーツの他の伝記も的確に評しており、キーツへの関心が深い人物であることが窺える。

1917年11月20日、キーツ要語索引の出版記事、キーツ要語索引 ウオシントンのカーネギー。インスチチューションから L. N. Broughton 其他數氏編纂の“A Concordance to the Poems of Keats”が発行された。四六倍判假裝四百五十八頁定價七弗。から、当時国内でもキーツがすでに広く知られていたことに加えて、Concordance を利用するほどにキーツ詩研究が進んでいたことが窺える。

1918年、海外で出版された英文学概論の新刊テキストを紹介する記事、「Herbert Bates 氏は紐育のロングマンス會社から『English Literature』を発行した。英文學の全般に亘つて歴史的に記述したるもの。スキントン或はセイントベリー氏等の英文學史論に代つて一般的教科書として當用せらるるに至るであらう。挿畫數面書目附四六版布製六一九頁價一弗五十仙。²¹⁾」から、国内で使用する輸入教科書についても、その動向を知ることができる。今後、大学で使われた英文学のテキストについても調査を進めたいと考えている。

2.2.4. 日夏耿之介の学位論文

わが国における学術研究の集大成として学位論文を位置づけることができるのであれば、その研究対象として、今日、英詩人キーツの研究者として知られる日夏耿之介について、当時の新聞紙上での扱われ方を知る上で、つぎのような記事があることは興味深い。

「日夏の學位論文？」(1937年5月16日)「展望台」欄には、日夏耿之介の學位論文と自費出版の歌集についての記事が見られる。ここでは見出しのタイトルに注目したい。「日夏」が日夏耿之介を示すことが周知であること、タイトル末尾に置かれた疑問符「？」と、タイトルフォントの大きさ、さらに記事内容と表現の滑稽さから、この記事に特別な意図が込められているようにも考えられる。本来ならば「數年來病床生活を續けてゐる日夏耿之介」の消息であり、「最近一千枚に餘る創作心理の過程を脱稿、近く日英兩國に於て出版の豫定である」という日夏の研究活動に関する進捗状況の報告であるが、「右は氏の否定にも拘はらず學位論文として提出されるものと考へられてゐる」とは、誰が日夏に問うているのか、また誰によって學位論文であると考えられているのか、なぜ日夏は否定するのか、などこの記事への疑問は多い。常日頃の日夏の研究活動への期待や関心の高さからこのような表現になっているとも考えられる。一方、これに続き「その日夏氏が余技の歌百首を集め「病草紙」として先日出版したがこれがナント唯の二冊。といふのは山宮允氏が氏の歌に惚れ込み自費出版を引受けたところ印刷半ばにして本屋側と喧嘩してしまつたため内務省納本を別として著者の許へ届けられたのは見本刷の僅か二冊に過ぎず、このうち一冊を山宮氏に分けサテ御兩人今に値が上るぞ、何しろ天下の稿本さとトンダところで鼻を高くしてゐるのは愉快。」と、日夏が私家版の歌集を出版したが本屋と仲たがいで世界に二冊のみの本になったことを報じる表現との対比が記事中にみられる。今日、私たちが知るところの英文学者としての日夏耿之介像と、日夏の私生活との間に意外なギャップがあることを当時の新聞を通して知ることができる。日夏の背景を知らない

一般読者には、日夏のユーモアあふれる記事を面白く読み、日夏の豊かな人間性を知ることになったであろう。

2.2.5. 英詩人キーツ像 2. 夭折詩人キーツ

大正7(1918)年2月7日付野口米次郎「故フ井リツプス(上)」で野口は、我が身をフィリップス²²⁾(Stephen Phillips, 1864-1915)に投影し、世間の評価が高い時が死すべき最適の時であり、今ではもうその時機を逸していると、つぎのようにキーツが惜しまれ夭折した詩人であることを記している。

「キーツが長命したならば何んな結果に成つたであらうかは確に興味のある問題であるやうに、死んでよい時に死んだ詩人は幸福である。所でこのフ井リツプスは死すべき時に死な、かつた不運な詩人の一人と成りつゝあるのではあるまいかと思ふと身体はぞつと震へる……だか、僕は自分のことを此處では書かぬ。」

野口は、「A君。僕は君の手紙を読んだ。英文學に對する日本の文壇の輕蔑乃至默殺に就いての君の不平を読んで」と文を始める。仮想のA君を通して、当時の日本文壇における英文学や英詩の位置づけに対して英詩人の立場からも野口は不満を明らかにしたものと思われる。

2.2.6. 英詩人キーツ像 3. 恋人ファニー・ブローンとキーツ

谷崎精二「作家と私生活(下)」(大正15(1926)年9月16日)では、「キーツの戀愛詩は彼と愛人ファニーとの関係を知る事によつてより良く理解される。作家と同時代の讀者は雑誌のゴシップ記事は何かで臆ろげながら作家の私生活の輪郭を察し得る。だがそうした便宜の無い後代の讀者に執つて、作家の私生活に就ての豫備知識を持つ事は作品を味ふ事に必要でないと云へない。即ち作家自身が其の生活を覆ふ事無作品の中に示す事は、さうした事情から云つても大切である。」と、キーツ詩を研究するためには、キーツの私生活を知ることがキーツ詩理解を深める助けになるという。日本の読者にとっては、ス邁爾斯(スマイルズ)『西国立志編:原名・自助論』(中村正直訳 須原屋茂兵衛 明治3(1867)年)の中でのキーツの生い立ち²³⁾や、明治27(1894)年の『文学界』3月号で平田秃木が「薄命記」と題し、キーツに関する記述として、キーツがファニーに送った3通の手紙を紹介したことなどが、キーツの私生活を知る手がかりとなるものであった。これらから、若い頃に両親と死別、貧しい生活、無学、肺結核、ローマへの転地療法、詩集を出すも悉く評価を得られぬ失意、片思いの恋人ファニーの存在などの日本人のキーツ観が大正期にはすでに形成されていたと考えられる。

2.2.7. ラジオでの英詩教育

わが国では、大正14(1925)年3月22日午前9時30分、東京・芝浦の東京放送局仮放送所からラジオの電波が放たれた。本放送の開始は同年7月12日東京 JOAK、同年6月には大阪放送局 JOBK、7月には名古屋放送局 JOCK が、それぞれ独自の番組編成で放送を開始し、英語教育放送も行なわれている。翌大正15(1926)年2月22日のラジオ番組欄では、英語の渡邊半次郎の写真と、「田舎娘を歌つた／英詩を講義する／渡邊半次郎先生が／今週の英語講座を持つ」と、渡邊の抱負を掲載し、放送ではテニソンの「ドーラ」とホイットチャー(John Whittier, 1807-1892)の「モード・

ミューラー」を各三日間づつ紹介している。翌大正16(1926)年4月20日のラジオ番組欄では、「附属中學の先生が／英詩の講義／春向の題材を選んだ／今週の講座」と、高等師範学校附属中学の英語主任左右田實の写真と経歴、抱負を掲載し、放送ではブラウニング、メースフィールド(John Masefield, 1878-1967)、ワーズワース、ブルック(Rupert Brooke, 1887-1915)を講義している。ラジオ放送を通して英詩教育が行なわれるようになり、英詩にふれ、英詩を知り、英詩を理解する新しい層が広がった。

2.3. 昭和期(太平洋戦争前)のキーツ受容

2.3.1. イギリス詩壇のキーツ批評家の死

■齋藤勇「逝ける英詩壇の巨星ブリッジス氏／代表作は「美の光り」」(1930年4月23日)「文藝欄」
「現代イギリス詩壇の巨星にしてイギリス宮廷奉仕勅撰詩人たるロバート・ブリッジス博士は最近チルスウエル²⁴⁾の自邸に於いて病氣療養中であつたが廿一日午後逝去した享年八十七才」と、キーツのすぐれた評論『ジョン・キーツ *John Keats*』(1895)でも知られる詩人・批評家、で英国詩壇の第一人者として知られているブリッジス(Robert Bridges, 1844-1930)が4月21日に亡くなったことを報じている。本文中、キーツ研究家の齋藤勇とブリッジス博士とは、イギリスで亡くなる七八年前に会ったと記されている。

2.3.2. キーツの墓

■「キーツとシェリーの墓^{あば}發かる? ²⁵⁾」(1935年5月19日)「海外文藝ニュース欄」

キーツとシェリーが眠るローマの墓地が街路拡張の為、移転するとの報道がイギリスに伝わり、大反響を呼んだ。在英イタリア大使館からイタリア本国へ照会した結果、英伊両国民から讃美され、敬愛されている両詩人の墓は特別に配慮され永遠に移転されることはないとの声明を大使館が出している。これは、アメリカやカナダにも報道されてキーツ・ハウス(Keats House)のあるハムステッド(Hampstead)市長宛に、キーツの弟ジョージ・キーツの孫娘とその妹からの問い合わせをも含む多くの手紙が海外から届いたという。キーツとシェリーというイギリスロマン派詩人が、イギリスだけでなくイタリア、カナダ、アメリカの人々たちからも愛吟されていることが伝わる記事である。

2.3.3. キーツ主人公の戯曲(1)

■「キーツを主人公にした新劇²⁶⁾」(1936年3月28日)「海外ニュース欄」

ロンドン藝術座 Auts Theatre でキーツを主人公にした劇「輝ける星 Bright Star」が脚色され、上演されることになった。主題は、キーツと恋人ファニー・ブローンとの恋愛である。題名はキーツのソネット「Bright Star」に由来するといわれる。配役は、主人公キーツ役にペイター・デージェンニイ(Peter, Dergency, 1906-1970)、恋人ファニー役はキャロル・クーム(Carol Coombe, 1911-1966)の予定。キーツとファニーとの恋愛は、平田禿木の「薄命記」以来日本人にとっても馴染み深いものである。キーツとファニーとの恋愛をテーマに扱った演劇は、現代でも上演されている。

なおロンドンのハムステッドにあるキーツ・ハウスが改装された際、ジェームズ・ヴィーチ (James Veitch) の脚本演出で「ハムステッドのキーツ Keats in Hampstead」と題してキーツ・ハウスで2009年7月17日から8月1日まで上演されている。現地での評価も高い²⁷⁾。

2.3.4. ヘレン・ケラーの愛読した英詩人キーツ

■中山昌樹「ヘレン・ケラー／會見印象記(3)」(1937年3月14日)

盲目の女性教育家、ヘレン・ケラー (Helen Keller, 1880-1968) は、1937年、1948年、1955年に来日している。女史の初来日の際のインタビュー記事が数回にわたり掲載され、その中に「先づ第一に文學に就て語り英文學中最も愛好せられる人物は誰であるかと尋ねると、それはシェレイ若しくはキーツであると即座に答へられた。」との記述がある。記者は、質問の一番最初に英文學への関心を尋ねている。女史の関心がシェリーとキーツにあることを知り、それ以降、「我等の間の會話の話題はそれからそれへと展開して多岐に互った。」ということから、キーツが緊張をほぐすものの (icebreaker) となったと考えられる。

2.3.5. 外国文學研究者相互の理解への期待

■片山敏彦「外國文學の見方／読書の機縁(下)」(1941年6月26日)「文化欄」

ハンス・カロッサ (Hans Carossa, 1878-1956)²⁸⁾ の翻訳で知られているドイツ文学者の片山敏彦は、オーストリアの詩人リルケ (Rainer Maria Rilke, 1875 - 1926) が世に認められた最初の著作『英國詩人論』を読み、「ブラウニングとかキーツとかいふ過去の人人が自分の今の生活にも有縁なすばらしい存在であるを感じさせられたのであつた。／そしてこの事實からも私は一つの示唆を受けた。たとへばドイツの權威あるフランス文學者の著作や、フランスのすぐれたドイツ文學者の仕事が我が國へ良心的に紹介されたら、今の日本の外國文學に對する見方と考へ方にとつてずるぶんい、刺戟になりはしないかと思ふのである。外國文化と文學に對する我が國の研究態度は、各分野相互に流通する氣風が乏しく、そのため同一内容のことを別々の表現でいつて互に氣がつかぬこともあり、日本人としての方法論を鍛へる機會を缺き易く、又それ、〔筆者：ぞれ〕の限界がともすればせましくなる惧れなしとしない故である。／然しそれも既に人々によつて氣づかれてゐることであり、それを實行する機運も見えてゐるのは欣ばしい。…」と、述べている。ドイツ文学者の立場から、ドイツ文学を通してキーツやブラウニングを理解した上で、今後は外国文学研究者相互の交流の機運が高まることを期待している。

ここから、明治・大正期においては、外国文学の翻訳者たちが各国文学相互にわたって関心のあつたものを扱っていたのが、第二次世界大戦前の昭和時代に至っては、片山のいうように、各国文学相互の交流が少なくなっていく、その結果、このようにドイツ文学研究者がドイツ文学研究を通して英詩への理解を深めることになるといった事態が生じたことが分かる。これは、外国文学研究が国別に細分化し、より専門分化が進んでいったことを意味している。

2.4. 昭和期（太平洋戦争後）のキーツ受容

2.4.1. 八木重吉とキーツ

■「こよみ」欄（1971年10月26日）

「こよみ」欄は、その日が誕生日／死亡日の著名人を、写真入りで紹介している。この日は、大正2（1913）年に大阪で生れた作家織田作之助（1913-1947）と、昭和2（1927）年に茅ヶ崎で死んだ詩人八木重吉（1898-1927）を扱っている。紙面には、八木がキーツに傾倒したこと、麦書房からキーツ、ブレイク（William Blake, 1757-1827）の訳詩と関係者の回想をまとめた遺稿集²⁹⁾が出たばかりであることが記述されている³⁰⁾。ここでもキーツは没後50年近く経てもなお評価の高い詩人、八木重吉に大きな影響を与えていることがわかる。

2.4.2. 訳詩集の出版ブーム

キーツ訳詩集は、明治期に田山花袋訳、大正時代に渡辺正知識でそれぞれ出版されている。戦後の広告欄には、大和資雄・出口泰生訳（平凡社世界名詩集第2巻）の出版広告³¹⁾が見られる。安東次男が、「詩の翻訳の嘆き／読者のタメにならぬ？」（1967年1月28日）の中で、外国詩の翻訳ブームについて、「…S社〔新潮社？〕の『日本詩人全集』の売れゆきが現在のところ一卷二十万部を越えるときけば、やはりほんやく詩の場合も相当の売れゆきを示すものと思わねばなるまい。」から、わが国では当時、詩集の販売部数が大変多かったことを知ることができる。この頃出版された詩集には、翻訳詩も多く含まれており、このことから出版業界としては、翻訳詩集を出版すれば、自ずと販売部数も多いであろうことが容易に想像できたのであろう。このような背景を理解した上で、「こんなことを書けば、バカげたことを気にしていると思う人もあろうが、一口にいて外国詩のほんやくがそんなに売れては困るのである。…上田敏の訳したベルレーヌ（Paul Verlaine, 1844-1896）の『落葉』の詩など、かなり原詩のスタイルまで写しとっているが、まずこんな例はごく、稀（まれ）だと心得てよい。『海潮音』の多くの詩は、ほんやくという形式によった上田敏の詩作のこころみであって、原作者の詩とはほど遠い。ほんやくによって写し取られるのは、一つの詩の状況なり素材なり思想なりであって、その詩の本質ではない。音とイメージのかかわり合いが緊密で手がこんでいればいるほど、詩のほんやくは徒勞となる。」と原詩と翻訳詩は似て非なるものと指摘したうえで、「どんなにたどたどしい語学力でもよいから（といえは語弊がある。むしろいうならばたった一行の詩句を読むために一つの語学を習得して）詩は原詩で読め、ということになる。」と、翻訳詩の読者に原詩を読めるようになれと叱咤激励する。「原詩に比較的忠実なほんやくとは、さしずめ一見へたくそきわまりない散文訳で、しかもその詩の詩たるゆえんを一行の詩句、一つの詩語の何倍、何十倍にも及ぶ訳注で補足したもの、ということにでもなろうかと思う。これはたぶん売りものになるまい。しかしそれが売れないと困るのである。訳詩の朗読ソノシートなどにゆめゆめだまされなさんな。」と翻訳詩の読者だけでなく、「ブームというものはおそろしいもので、日本の詩の全集がいくつか計画されると、外国詩のほんやくの全集も矢つぎばやにいくつか計画される。現在わかっているだけでもS社、K社〔講談社？〕そのほか計五社におよぶし、これに以前から青少年向けのほんやく詩集シリーズを刊行して好評だった一、二の出版社を加えると、今年あたりボードレール（Charles-Pierre Baudelaire, 1821-1867）だのベルレーヌだのハイネ（Heinrich Heine,

1797-1856) だのという名まえが書店にはらんしそうだ。ほんやく詩の朗読ソノシートをつけたものさえ現れた。」と出版界にも警鐘を鳴らしている。ここで安東が危惧している翻訳詩全集の中にもキーツ翻訳詩は含まれていることから、翻訳を通してキーツ詩を知る読者も当然多かったことであろう。翻訳詩集の点数こそ少ないキーツではあるが、翻訳詩全集の出版があったからこそ、英文学に馴染みのない日本人の間にも、多くのキーツ詩が読まれる機会があったと考えることができる。

2.4.3. キーツ直筆の手紙

■「これぞ幸福の手紙！ キーツの私信に八百万円³²⁾」(1972年6月28日)

ここで、キーツを見出しに扱った記事が、夕刊の社会記事として扱われていることに注目したい。ここまで本稿では、読賣新聞の朝刊で文学を中心に扱う欄について取り上げてきた。これは、文学に関心をもつ読者であれば定期的に目を通すであろうと考えるからである。しかし、この記事は、夕刊で、単発記事として掲載されたものであり、海外の出来事を扱うニュース記事として、キーツが普通に扱われていることが重要なのである。ここでは、もうキーツに対して、その肩書きに英詩人を冠さなくても、シェイクスピアと同じように、その名前が市民権をもって一人歩きするように日本でも認識されたことを示していると考えられるからである。

キーツが恋人ファニー・ブローンに宛てた直筆の手紙が競売にかけられたことを報じている。これも『薄命記』で紹介されたキーツとファニーのかなわぬ恋のキーツ像と、キーツ直筆の恋文が、手紙としては過去最高額の八百八十万円という落札価格になったという記事内容においても日本人の関心を集める情報としての大きな価値があったと考えられる。

2.4.4. キーツ主人公の戯曲 (2)

■「アントニー・バージェス／相変わらずの健筆／新作「アバ・アバ発表³³⁾」(1977年6月17日)

英国の小説家・批評家アントニー・バージェス (Anthony Burgess, 1917-1993) がキーツを題材とした新作を発表したという記事³⁴⁾ (1977年6月17日) が海外通信欄で紹介されている。この戯曲はバージェスを書き下ろしたもので、これまでキーツが若くして客死した薄幸の詩人として知られていたものを、新たにキーツが夭折していなければ、と想定した設定となっている。キーツのユーモアというキーツの新しい側面を主題とする内容となっている。

2.4.5. キーツ研究の社会的評価

ここでは、海外におけるキーツ研究に関する受賞についての記事を紹介する。

■平松幹夫「痛烈な社会批判 [ノン・フィクション] / キーツ研究の労作 [伝記部門]」(1964年5月16日)「海外文学だより」紙面のママの転載

1964年度のピューリッツアー賞の伝記部門で昨年十二月ハーバード大学出版会から出版された七三二ページの大冊、ウォルター・ジャクソン・ベート (Walter Jackson Bate, 1918- [筆者1999]) の評伝『ジョン・キーツ³⁵⁾』が受賞した。³⁶⁾

■「文学賞の二重受賞／☆アメリカの場合☆／見直し論もあるが」(1978年6月7日)

現在[記事発行時を示す]、アメリカには約370の文学賞があり、その中でも最も権威ある文学賞は、六部門からなるピューリッツァー賞と、第二次世界大戦後設定されたナショナル・ブック賞であることを示した上で、「ことしは伝記作家・学者としても著名なウォルター・ジャクソン・ベイト氏が「サミュエル・ジョンソン伝」でピューリッツァー賞とナショナル・ブック賞の両賞を受賞している。ベイト氏は一九六四年にはイギリス詩人ジョン・キーツの伝記でピューリッツァー賞を受賞したこともある。今回の「サミュエル・ジョンソン伝」も内容は優れたものであるの、各紙誌とも絶賛しているが、二つの賞の一つを他の作家に授ける工夫もあってよくはないかとの声が出ている。」ベイト博士がピューリッツァー賞とナショナル・ブック賞をダブル受賞したことを報じている。その上で「しかし、一方では、これらの文学賞は従来通り独自に選ぶことが望ましいとの意見もある。つまり重賞によって作品の価値がいっそう明確になるという意見だ。日本の文学賞も数は多いが、このような二重受賞は少ない。果たしてどちらが好ましいかの議論は今後もつきないことであろう。」と結んでいる。ここでは、ベイト博士を伝記作家、学者と扱っているが、ベイトはキーツ研究の権威である。これらの記事を通して、海外での表彰についての紹介に加えて、キーツ研究およびキーツ研究者がさまざまな表彰を受けていることを知ることは、国内におけるキーツ研究についても学界に属する者は当然のことながら、一般の人々においてもキーツ研究に対する敬意を払うことへのきっかけとなるものであろう。これらの生地を通して、さらに広く一般の人々にもキーツが理解されていく上で、弾みをつけたであろうことを知ることができる。

2.4.6. アメリカの成功神話とキーツ詩

■「ノーマン・ポドーレツ著、北山克彦訳「文学対アメリカ 北米ユダヤ人作家の記録」[読書ノート]欄(1973年5月7日)

ユダヤ人の貧しい移民の子に生れたノーマン・ポドーレツ(Norman Podhoretz)が、自分の生れ育った社会から離脱し、WASPのコピー即ち「キーツの詩とセザンヌの絵とモーツァルトの音楽を好むこと」への道をあえて厭わず異なる文化への自己を転向させることなしには、著者のような環境に育った人間がアメリカで成功することはあり得ないと、アメリカに反発しながらもアメリカを受け容れざるをえないユダヤ人作家の特異な状況を書評の中で説明している。キーツ詩が欧米文化の中でどのような位置づけであるのかを示す好例といえるだろう。

2.5. 平成のキーツ受容

2.5.1. キーツ主人公の映画「ブライト・スター」

■恩田泰子「ブライト・スター／～いちばん美しい恋の詩～／英・豪」(2010年6月4日)

■元木崇「[シネマの世界]「ブライト・スター／～いちばん美しい恋の詩～」(2010年8月18日)

2010年、キーツとその恋人フニー・ブローンを主人公にした映画「ブライト・スター³⁷⁾」が公開されたことから、芸能欄にもキーツ関連記事がみられる³⁸⁾。この映画の公開によって、注目されている映画監督や俳優にも話題や関心が集まり、これを契機としてわが国における従来の英詩研究や、英詩鑑賞を楽しむキーツ理解者の存在に加えて、この映画を通して若い年代からお年寄りまでの幅広い年齢層の人々にもキーツを知り、理解できる人々の層を広げたと考えられる。

2.5.2. 訳詩集と朗読

新聞広告の中で、これまで出版という紙メディアを中心に論じてきたが、ここで音声メディアというもののの中にキーツを扱うものが出てきたことに注目したい。詩歌を読むだけではなく、耳を通して聴くことを加えた詩の新たな楽しみ方が、わが国にも広がり、新聞広告を通して、一般にもその存在を知らしめ、購入の機会が増えていくであろうことを知ることができる。シリーズに『名訳で聴く世界名詩選』を含む『永遠に残したい日本の詩歌大全集全10巻³⁹⁾』(ポニーキャニオン、2012)が発売され、収載詩全56篇の内、英米詩人は、ブラウニング、ホイットマン、ワーズワース、イェイツ、シェリーの5詩人である。ソノシートからCDへとメディアは変化した。訳詩の音読を楽しむ文化が確実に日本に定着したものと考えられる。この広告の中にはキーツの名前が含まれてはいないが、今日では語学関係の図書を扱う書店の店頭だけでなく、インターネットからも英詩の音源を楽しむことができる環境が整うようになった。

3. まとめ

ここでは、はじめに時代別にキーツ受容の特徴についてまとめる。

明治期のキーツ受容については、〈新體詩〉の形成において、キーツ詩は新體詩人に影響を与え、なかでも薄田泣菫には、第二期〈新體詩〉形成期の『暮笛集』、第二期〈新體詩〉最盛期の代表作品と評価される『二十五絃』に大きな影響を与えている。明治38(1905)年、〈新體詩〉は最盛期を迎え、田山花袋が本邦初のキーツ訳詩集『キイツの詩』(博文館)を出版する。

大正期のキーツ受容については、キーツの死後100年を記念するキーツ百年祭が大正10(1921)年2月に開催され、新聞は特別記事を掲載し、雑誌『英語青年』、『牧神』はキーツ特集をして、盛大にキーツ没後百年行事が行なわれる。東京帝大英文學研究別冊シリーズの第三巻として、佐藤清が、わが国初のキーツ研究書『キーツの藝術』(研究社、1924)を出版する。この頃までに、英詩人キーツの詩人像は、結核詩人、夭逝詩人、恋人ファニー・ブローンとのかなわぬ恋などから構成されている。ラジオ放送が始まり、キーツを含む英詩教育もラジオ講座で行なわれるようになる。

昭和期(太平洋戦争前)のキーツ受容については、ローマのキーツの墓の移転、キーツ主人公の戯曲の上演、キーツ批評家ブリッジスの死などが海外電で報じられる。この頃、外国文学研究が国別、ジャンル別に細分化されていく傾向になる。

昭和期(太平洋戦争後)のキーツ受容については、訳詩集ブームがあり、英詩朗読ソノシートでの英詩鑑賞も行なわれるようになる。わが国初のキーツ全訳詩集、出口保夫訳『キーツ全詩集全4巻』(白風社 1974)が出版される。キーツ直筆のファニー・ブローンへの手紙が競売で、書簡競売史上最高額で落札される。キーツ主人公の戯曲の上演、ピューリッツァー賞伝記部門をキーツ研究の権威ウォルター・バイトの『ジョン・キーツ』が受賞するなどが海外電で報じられる。ユダヤ移民のアメリカ成功物語を通して、キーツ詩の欧米での位置づけを知らせている。

平成期のキーツ受容については、映画『ブライト・スター』を通して、キーツの理解者層を広げている。

このように、わが国においては、日刊全国紙『讀賣新聞』を分析した結果、明治期から平成期ま

で途切れることなく、キーツおよびキーツ詩は、ともに人々に理解され親しまれてきたことが明らかになった。

これまで他の英詩人に比べてキーツの翻訳詩や訳詩集の発表点数が少ないことから、キーツの受容は遅れていることやキーツ詩が難解のため理解されにくいことが指摘されてきたが、日本では早くからキーツの受容がはじまったことが明らかになった。

さらに、新聞というマスメディアを通して、一般大衆へのキーツの受容を明らかにすることができた。今後は、他の新聞についてもキーツの受容過程を調査、分析し、各紙のキーツ受容において果たした役割の比較検討をしていきたいと考える。

注

- 1) 齋藤 晴恵「英語教科書が英詩受容に果たした役割―明治期の輸入英語教科書と英語教科書を中心に」『図書館情報メディア研究』8 (1) 2010, pp.29-43.
- 2) 齋藤晴恵「キーツ書誌の書誌」『文献探索』2000, pp.255-261. 齋藤 晴恵「キーツの”Ode on a Grecian Urn” 研究文献 -- 研究書誌というまだ見ぬ高峰を目指して」『文献探索』2001, pp.210-217.
- 3) 先行研究としてキーツ受容研究にはつぎのようなものがある。
松浦暢「キーツと日本」『キーツ：その夢と現実』吾妻書房, 1979, pp.289-343.
松浦暢“John Keats and His Influence on Modern Japanese Poetry.”『キーツ：その夢と現実』吾妻書房 1979, pp.405-418.
秋山勇造『翻訳の地平：翻訳者としての明治の作家』翰林書房 1995, 293p.
秋山勇造『埋もれた翻訳：近代文学の開拓者たち』新読書社 1998, 312p.
秋山勇造『明治翻訳異聞』2000, 230p.
岡田章子「日本のキーツ受容と将来」『英語青年』1995年12月 pp.516-517
岡田章子「第二次世界大戦前のロマン派受容」『英米評論』14, 1999, pp.129-155.
Akiko Okada “Japanese Scholarship on Keats” Keats-Shelley Journal Vol.39, 1990, pp. 166-181.
Akiko Okada “Translation of Keats’s Poetry in Japan” Keats-Shelley Journal Vol.44, 1995, pp. 147-164.
Akiko Okada “Reception of Romanticism in Japan Before World War II” The Keats-Shelley Review No.15, pp.88-106.
Akiko Okada “Reception of Romanticism in Japan After World War II” The Keats-Shelley Review No.16, pp.94-113.
Akiko Okada “Keats and English Romanticism in Japan” Bern: Peter Lang, 2006, 230p.
- 4) 本調査には、明治7年11月2日から2012年5月31日までに発行された読賣新聞を用いて、明治・大正・昭和・平成までの紙面を分析した。読賣新聞は、明治7（1874）年11月2日合名会社「日就社」が創刊したことにはじまる。初代社長は子安峻。当時の発行部数は約200部の隔日刊であった。読賣新聞の題号は、「読みながら売る」瓦版に由来したといわれる。（読売新聞小史 <http://info.yomiuri.co.jp/company/history.html>）
- 5) 上田敏「英國近代の文學（上）」（1902年11月24日）、「同（中）」（1902年11月25日）、「同（下）」（1902年11月26日）、「同（下）」（1902年11月28日）
■英國近代の文學（上）（帝國教育會に於て 上田敏）（1902年11月24日）
これは、1902年、帝國教育會に於て行なわれた上田敏氏の演説の要約である。この演説の目的は、「英文學研究者への注意を傍ら致して置きたい心から、」行なわれたものである。上田氏宅に本屋や書生が訪れ、「英文學の近のものを讀んで見たい、或は賣つて見たいと思ふが、誰の書が可からうとの相談であります。」と英文學の讀書案内が求められているが、「さて、彼等の相談に對して、左様、誰が可いであらうかとまづ答へて、さて忽せには之を指摘しないのであります。」と讀書案内には難しさがあることを指摘する。それは、「字句の難易ばかりではなく、時代の思想、社會の影響、廣く言へば歴史の上を知り、その近の文學に達するまでの道程をつて、然る後でなければ、到底成し遂げ得られぬのであります。少なくとも彼等は以上の事だけで

も、知つてこの相談を申すのでありませうか。頗る疑はしい。」と、相談者が英文学の研究の深淵を知らぬことを理由にあげている。上田は、英文学研究に関心をもつ人々が増えることを喜ぶ一方で、「然しながら是等の本屋や書生等が、假にも近の英文學をといふ事を口にするやうになつたのは、僅々半ヶ年後の風潮でありまして、其前にあつては口にするといふより寧ろ、彼等は全く覚えもしなかつたのであります。」と英文学研究熱が高まつたのはここ半年ほどのことに過ぎないと憂慮している。この記事から、英文学ブームとして、書店が文学書や翻訳書、研究書などを扱い、英文学研究者を志す学生が出て来たのは、1902年6月頃以降になるものと考えられる。

■英國近代の文學(中)(帝國教育會に於て 上田敏)(1902年11月25日)

上田敏は、まず、「近の英文學研究者 彼等は全くその研究の順序に就て、何等をも顧みないのでありまして、新しいものは何でも可し、珍らしいものは何でも尊し、と云ふやうな考へから、かういふ事になります。是は實に英文學研究者の弊害と謂ふべきものであります。」と、英文学研究者への注意を喚起した上で、続いて「英國の壇に立つ有名なる大詩人の名をば順序を追うて掲げ、且つ其の時代思想を知らうといふ為に讀まるべき重なる作詩を紹介しまして、」と、十八世紀末葉の詩人、佛國大革命の影響、湖畔派詩人と伊太利派詩人、コオルリツヂの順に、上田が大詩人と位置付ける人々を紹介している。キーツについては伊太利派詩人として扱い、「湖畔派詩人と伊太利派詩人」の中で、「當時シエキストと称し、湖畔に依つて一体をなしたる詩人がある。コオルリツヂ、ウオルツウオルス、サミュエル テイラア、ロバート サウジイ、ド クインゼイで。又別に伊太利國附近を徘徊して詩を作つたのに、伊太利派とも謂ふべき詩人がある。曰くバイロン、シエレイ、キイツ、リイハント等であつて、中には友人もあるし親戚もあるといふやうな分で、この兩派の詩人がこの十九世紀の壇を主に飾て居たものであつた。」と紹介している。

■英國近代の文學(下)(帝國教育會に於て 上田敏)(1902年11月26日)

「ラルツタルスとサウジイ」、「伊太利派詩人」、「バイロンの詩」について論じられている。バイロン、キーツ、シェリーなどが属するという伊太利派については、「伊太利派詩人は引返へて破壊党とも謂ふべきものでありまして、社會に反抗の精神は其文章上に現はれ、制度を破り道德を打破つといふ方の主義であるから、道學者流からは寧排撃せられるものである。」と、上田は紹介している。

■英國近代の文學(下)(帝國教育會に於て 上田敏)(1902年11月28日)

本欄で上田敏は、シェリー、キイツ、テニソンとブラウニングの英詩人4人を紹介している。キイツについては、「キイツの詩 キイツ(1795-1821)は前途有望の詩人でありましたが、羅馬に転地して肺の為に死んだのでありますから、詩は誠に少いので、追悼のあまりに、もし此人をしてなほ活かしめば、沙翁、ミルトンと同等の詩人たるべしとまで評したほどであります。エンディミオンは中での傑作である。希臘の瓶、悲み、サイチエニ、ナイチンゲルは短歌の有名なもので、ハイペリオン、セントマアクの夕べは、斷片ながら賞美されます。次いでリイハントであるが、是はキイツの師で、キイツを有望の士であると指摘したので有名なものである。英文學を研究するには、單にその詩文を讀むといふにも、是を希臘思想と基督教思想との二つを知つて、後に志たいものであります。殊にこのキイツは希臘的思想に富んだものである。」と、シェリー、テニソン、ブラウニングとは量的にも、内容においてもキイツは破格の扱いをしている。そして、「次いでキップリング、今大騒ぎをするロゼッティに移つて、研究をするのであります。」と英詩研究には順序があることを教えている。さらに、「要するに名詩は英國に特産でありますから、熱心に之を研究するのは、實に趣味あるものでありませう。」と、英詩研究を奨励している。上田の記述から、1902年頃の英文學研究においては、ロゼッティの詩がブームであつたことが窺える。その頃のキーツ研究やキーツ詩の翻訳と、ロゼッティのそれとの量的比較をすると大変少ない、これを上田は新しい物や珍しい物に飛びつく当時の研究者たちの姿勢に警鐘をならしているものと考えられる。

6) 日曜版の文藝欄に見られる外国文學翻譯關係の記事はつぎの通りである。

シエレー「胸なる墓」(水上幽波訳)1903年2月1日「筆のすさび」欄

シエレー「時」(水上幽波訳)1903年2月8日「筆のすさび」欄

ゆうごー「薔薇と墓」(無絃訳)1904年12月25日「日曜附録 流風餘韻1」

かめる「虹に寄す」(無絃訳)1905年1月8日「日曜附録 流風餘韻2」

「春香傳の數節」(小原無絃訳)1905年1月29日「日曜附録 流風餘韻」

「朝鮮歌謡」(小原無絃訳)1905年3月19日「日曜附録 流風餘韻6」

「梅の小家」(無絃訳)1905年3月19日「日曜附録 飛花落葉1」

- 「あはれその犬」(無絃)1905年4月2日「日曜附録 飛花落葉2」
 うを一づをうす「雲雀に與ふ」(無絃訳)1905年4月23日「日曜附録 詩」
 「君よ」「夕野に立ちて」(無絃訳)1905年3月19日「日曜附録 飛花落葉3」
 ユーゴー 「門づけ」「望むは」(無絃訳)1906年1月14日「日曜附録」
 ワーズワース「麥刈る乙女」(無絃訳)1906年2月25日「日曜附録」
 「二妖姫 コレリッチのクリスタルベルより」(無絃訳)1906年6月10日「日曜附録」
- 7) 孤島「閑是非録(新體詩の過去將來)」「日曜附録」欄 明治39(1906)年3月4日
 「過去に於て新體詩の最も榮えたのは、明治30年藤村子の『若菜集』が出た、あの年だらうと思ふ。」とあり、同年には田山花袋、松岡國男、天來、天遊、鹽井雨江、大町桂月らの詩集も出版され、「外山氏等の『新躰詩抄』に新體詩の端を發してから殆んど十五年、此の間の研究の結果は『若菜集』で一先づ集大成された観がある。」と、新體詩は『若菜集』までが第一期の形成期であったとしている。孤島は、『天地有情』(明治32年)で「晚翠氏の歡迎されたのは或意味に於て藤村子を中心とした戀愛詩がやゝ飽かれて來た傾向を示して居る。」と指摘する。『若菜集』と『天地有情』は共に七五調であるが、柔らかな感じの『若菜集』に対して晚翠が漢字やカタカナを用いて硬い勇ましい感じを出している。そして新體詩は明治38(1904)年に再び最盛期を迎える。これが新體詩の第二期にあたり、薄田泣菫の『二十五絃』が代表的なものである。この時代の新體詩人は従来の形式打破(五七調、七五調)を目指し、テーマも従来の戀愛から神秘を中心とした。蒲原有明の『春鳥集』、上田敏の訳詩集『海潮音』が出版され、新體詩は形式やテーマではなく新たな道を模索していくことを示唆している。
- 8) 薄田泣菫『二十五絃』春陽堂, 1905, 304p.
- 9) 1899年8月30日「國民英學會 神田區錦町の國民英學會にては來月一日より更に英詩朗吟科なるものを設け英米にて専ら人口に膾炙する詩歌の吟詠法を教授する由」
 1911年3月28日「青山女学院聯合文學會 …新時代の女達が代る々登壇して英詩英文暗誦、詩歌朗吟、獨奏、演説、合唱をやる、來賓席にはヨオロツパの婦人なども見えて場内は山の手趣味の粋を蒐めつくしたやうだ」、
 同年8月21日「日本女學校懇話會」という見出しで、夏休み中の訓育のため、校内で職員、生徒、卒業生の懇話会を催し、余興として「音楽英詩吟誦牽手花の展覽手料理の饗應等あり」
- 10) Akiko Okada “Japanese Scholarship on Keats” Keats-Shelley Journal Vol.39, 1990, pp.166-181.
 岡田章子「第二次世界大戦前のロマン派受容」英米評論 14, 1999, pp.129-155.
- 11) 田山花袋訳『キーツの詩』博文館 1905, 144p. これは全訳詩集ではなく、キーツ詩23篇が翻訳されている。
- 12) 「ジョン・キーツと日蓮上人と」(1921年2月6日)「讀書界と出版界」
 ◆……恰度今から百年前の今月廿三日近世英國の一大天才詩人ジョン・キーツが羅馬で客死した。」で彼れの百年忌に當ると云ふので我二月の雜誌界にもチラタ彼れに關する記事が散見される。が唯それだけで同じ純粹の美の歎仰者であり乍らオスカー・ワイルドは近來單行本の譯も餘程出版されてゐるに對しキーツの單行新譯本は一向見當らない。薄倖の詩人は大正の出版界にまでも薄倖なのか。◆……この哀れなキーツを二月號で温かに取扱つてゐる雜誌として『英語青年』と『牧神』とを擧げる。／◆……『英語青年』は語学雜誌の元老株であるがまた仲々進んだ英文學の専門的研究をやつてゐるので二月號所載岡倉由三郎氏の『ラ・ベル・ダーム・サン・メルシ譯』厨川白村氏の『オード・オン・エ・グレスアン・アーン譯』斎藤勇氏の『キーツ研究書日』竹友藻風氏の『キーツ解説』等は總て此際彼れを追想するに最も充分なものであらう。『牧神』は斎藤勇／伊藤白蓮、服部嘉香、野口雨情、山田耕筈、藤森秀夫、近衛直麿、三木露風の諸氏を同人とする牧神會の發行で二月號を『キーツ記念號』にして彼れの自筆原稿の寫眞その他彼れの評傳譯詩等を載せてゐるが總て真摯な研究資料として尊いものである。
- 13) 大正10年2月22日文藝欄「よみうり抄」「キーツ百年記念會 明廿三日午後六時から帝大山上御殿に開催「キーツの頌歌に就て」(土居光知氏)「キーツ作聖マコ祭前夜」(斎藤勇氏)「キーツに寄する自作ソネットの朗讀」(豊田實氏)の講演あり」
- 14) 山極勝三郎博士の生涯と業績 (<http://museum.umic.jp/yamagiwa/doctor01-1.html>)
- 15) 斎藤勇(1887.2.3.-1982.7.4.)は、明治20年2月、福島県伊達郡に生れ、3歳の頃から英語に親しんだという。難解な英詩の翻訳・注解に大きな業績があり、英詩の権威とされており、キーツ研究は英米でも高い評価を受

けている。著書『イギリス文学史』は、不朽の名著とされている。若い頃に植村正久牧師から受洗して熱心なクリスチャンであった。参考資料：讀賣新聞（1982年7月5日）、朝日新聞（1982年7月5日）

- 16) 齋藤勇「キーツ逝いて一百年／＝けふ羅馬で死んだのだ＝」（1921年2月23日）記事本文は以下の通り。「『君達が天折後滿百年を記念するとか何とか言つて、そのキーツといふのは、一體どんな男だ』と聞く人があるならば、私はロゼティの句を引いて、『苦痛を賦與された詩人』と答へるに止めたい。併し心から彼れを追慕する人にはかう言ひたい。――幼にして兩親を失ひ、これといふ學校教育をも受けず、詩集を出しては徒に漫罵を蒙り、身は病弱戀しては空しく心を痛め、傷ける心を抱いて、滿二十五歳四ヶ月の短生涯を百年前の今日、さびしくローマの一隅で終つた天才詩人ジョン・キーツは、『戀』をも『大望心』をも好んだが、併し最も慕つたのは彼れの所謂『わが魔、詩歌』であつた。彼れにとつて詩は、中世紀の物語などにあるやうな、『魔物の戀人』であつたのだ。詩を作ることに熱中すれば體が弱る。けれども彼れはそれを棄て得ない。彼れの詩は描かれてゐるコリントの一青年が妙齡の美人に化けた蛇に儘されて終に身を滅ぼすやうになつたといふのは、彼れ自身の心裡を告げてゐるものであるまいか。しかもコリントの青年は戀されたのであるが、キーツは自ら戀して燃え且つ盡きたのである。私の大好きな詩人、等しく薄倖にして世を去れるフランシス・トムスン^{不滅}の句を借りて言へば、彼れが與へられたのは、／憐れみ知らぬ物の怪、／『美』にこそあれ。そを賞めたたへ／夜々ゆめみ、／とはにそが物なれど、／そは終に彼れがものたらず。／曾てシエリについて私はこんなことを講じた――『シエリの詩はキーツやフランシス・トムスンや北村透谷などの作の如く、生ける炎である。彼等自身は蠟燭である。炎を以て世を照らす為には蠟燭が溶け去らなければならない。彼等の詩は生ける血と肉とを以て書いたものだ。彼等のライフ・ブライドだ』と。この言葉はシエリよりもキーツの場合に於いて更に當を得てゐる。こゝにキーツの偉大が存する。――一體キーツは誤解されてゐた。偉大などといふ文字は彼に冠する言葉でないやうに思はれてゐた。唯花やかなセティメンタルな空想の世界にのみ漫遊する男の様に考へるならば、キーツの眞價を解し得た者でない。或程、彼れは耽美派、藝術のための藝術の人々にも甚大な影響を與へた。けれども直ちに彼れを以てデカダンの先祖ででもあるかの如く推斷するのは、怨し難き謬見である。勿論彼れは、口中を唐辛子で塗りつけて赤葡萄の冷味を試みたとか、七週間もぶつ續けに酔眼朦朧であつたとか、さういふ傳説的な話が流布されてゐるけれども、キーツは感覺的でこそあれ、決して肉感的でない。当初は『花の女神と牧羊神との闘士』にうかれて居れば、それで立派な詩人だと考へたこともあるが、一面に於いては非常に嚴肅な人生の實相に触れることを務め、且つ苟も大詩人たらん者は必ずやこの苦き杯を飲み乾さなければならないと信じてゐた。／世上の惨事を惨事とし／為めに自ら休み得ぬ者／でなければ詩の國の高御坐を占めることができない。この確信を以て健闘を續けたキーツは、實に偉大だと、私は飽く迄も歎美せざるを得ない。彼れは決して高踏的耽美的詩人として目せらるべきでない。それは『牧神』キーツ記念號に於て詳論したことであるから、今くり返すことを好まない。／さればと言つて、私はキーツを所謂人道派、民衆派の詩人だなどといふ愚物となりたくない。彼れは眞に美を愛し、詩魔に魅せられしかも高級の美が苦痛と葛藤との中に現はれることを體驗する人々によつてのみ、眞に鑑賞され愛好される詩人である。故にキーツ愛讀者が數に於いて限定されるのは當り前だ。彼れを記念するに、御輿でもかつぎ廻るやうなことは最も避けなければならない。」

- 17) (1922年6月23日)「よみうり抄」欄 記事本文は以下の通り。「▲シエリ百年祭 を記念す可く雑誌「詩聖」は全誌をシエリ研究に費し野口米次郎、矢野峰人、佐藤清、土田杏村、横山有策 齋藤勇、大藤治郎、日夏耿之介氏等が執筆す」

- 18) 齋藤勇「シエリ百年忌に」(1922年7月10日) 記事本文は以下の通り。

「いづこよりぞ、麗はしき光りは？／うす闇にうづく世界を／照らす光りは詩人の光り、／燃え、燃え、燃ゆる焦苦は詩人、／人の心の底にひそめる、／古くしていや新しき、／神秘の宮居、見えざりし我、／この焦苦に照されてこそ、／人々はたと思ひ當る、／生れざる古へよりの／親しきものは、己が姿を、／初めて眺め、よるこび歌ふ、／飽かず眺めてよるこび歌へど、／然え、燃ゆる焦苦のとけゆく、／世の人は知らでぞ踊る、／永しへに燃えよ、生ける蠟燭！」

- 19) 「英文學研究別冊第三キーツの藝術」(1924年7月10日)「広告欄」

「■文學士 佐藤清先生著一帝大英文學研究別冊第三◆定價金壹圓五拾錢送料／六錢／英文學研究／別冊第三／キーツの藝術／日本に／於ける／最初の／キーツ研究書／美の●徒、戀と詩の殉教者ジョン・キーツ、彼の若く果敢無き生涯は、その歌へる「直紅の翅の灯取蟲」にも比せらるべし、而も彼は後代は數多の禮讀者を發見せり、少くとも、ラファエル前派、テニスン、スキンパーン等の藝術は彼の詩を深く究むるによつ

てのみ初めて味到し得可し茲に日本に於ける最初のキーツ研究書成る此の天才の代表的諸作品に就き懇ろに説明し、縦横に論述し、且つ髓越燃犀の創見に満てり、我が評論界稀に見る収穫として切に篤學者諸氏に薦む。」

また、1925年11月9日には、「關口晃南譯著 四六布製 定價一圓五十錢／箱入美本 送料十六錢／（發賣）やさしい英詩の學び方／英詩研究の初等用として中女學校三四年生の諸君が多年欲求せられし本書はいよ（いよ）諸君の机上に飾られむとしてゐる。是非一卷を座右に備えて原詩の味讀あらむ事を御薦めする著者は英國學士として錚々たる語學者で有る。」と、当時の中学・女學校三四年生において英詩教育が行なわれていたことが、この広告から明らかになる。

20) 1923 (大正12) 年3月1日 讀賣新聞朝刊広告 新刊 シエリ研究

東京帝大英文學會編

四六判假表裝／壹圓五拾錢／東京帝大英文學研究別刷第二／三百餘頁口絵入／送料金六錢

本集は我國に於けるシエリ研究の權威を以て推さる諸家の執筆に成る、此の天才詩人の／満百年に際し、我英文文壇の代表的記念物として、本集の右に出づる物はない、且つこれ／を歐米各國に於ける記念出版の中に伍するも獨創と透徹と精緻とに於て、正に其優位を占／む可く、而もシエリの詩品が永久欄頭の価値ある以上本集も亦常に寫實なる、英文學研究／者の書齋に藏せらるべき好著である發行所 東京麴町富士見町／振替 東京 二八六〇一／研究社 出版目録申／込次第進呈

21) 「▲英文學概論」「海外文藝消息」欄 (1918年7月2日)

上田敏が「英國現代の三詩人」(『學鐙』第八年第一號 明治37年1月)の中で、「十九世紀前半の英詩人にして、吾邦の學界と文壇とに汎知せらるものは、Byron, Shelley, Wordsworth にして、Keats, Coleridge これに次ぎ、Landor に至りては、之を云ふもの少なし。William Watson, Stephen Phillips, William Butler Yeats の三詩人の細目を『英國繪入雜誌』の書史から紹介している。野口がフィリップスは36歳で『Marpessa』(1900)が初めて認められた詩集だとしているが、上田によると『Primavera』(1890)の中に“To a Lost Love” “A Dream” “Orestes” (1890) から作品が發表されていること、1900年以前にすでに14冊の詩集が刊行されていることがわかる。

23) スマイルズ『西國立志篇』中村敬太郎 (正直) 訳 原文では、Keats was druggist. を中村訳では、「其子ハ売藥商ノ子ナリ」と誤訳が指摘されている。

24) ブリッジスは、Berkshire (現: Oxfordshire) の Boar's Hill で亡くなったとされる。

25) (M・T生)「キーツとシエリの墓發かる?」(1935年5月19日)「海外文藝ニュース欄」本文は以下の通り。

「イギリスの浪漫派詩人の二巨星キーツとシエリとが共にローマのプロテスタント・セミトリに眠つてゐることは有名だが、この度墓所付近の街路が市區改正で擴張されるため、この二詩聖の墓も取移されるといふ報道が英本國に傳はり、大いにセンセーションを起した。ロンドンの伊太利大使館から本國ローマに問合せの結果、市街擴張は現に行はれてゐるが、伊太利で讃美され、敬愛されてゐるこの二大詩人の墓には特に考慮が拂はれ今後とも永遠に侵されることがないであらうといふ聲明が大使館から發表された。／この報道が一度びハンブステイードのキーツ・ハウスから米國に傳はるや、ハンブステイードの市長の許にはカナダ及合衆國より多くの手紙が集つた。そのなかには詩人の後裔からのものが含まれてゐる。それは今から約百年前に合衆國に移住したキーツの弟のジョージ・キーツの孫娘に當る現在ニューハンブシヤに住むエラ・アルステイン夫人からであつて、夫人はその妹アリス・ハートウエル夫人と共にこの放送を聞き驚いて問合せの手紙を出したものである。」

26) 「キーツを主人公にした新劇」(1936年3月28日)「海外ニュース欄」

「ロンドン藝術座 Aut's Theatre では、先頃パイロンを主人公にした劇を上演したが、此度同じ十九世紀浪漫派詩人ジヨン・キーツを主人公にした新劇が脚色され、上演されることになつた。この劇は、詩人とファンニー・ブラウンとの戀愛から取材したもので、劇名を「輝ける星」“Bright Star”といふ。この題名はキーツのソネット詩作の one から取つたものといはれる。主人公の詩人キーツに扮する役者はペイター・デジエンニイ、戀人ファンニイに扮する女優はキヤロル・ケームの豫定。」

27) 批評はつぎの通りである。

A charming dramatisation. The author and director James Veitch does not assume that we have the attention span of gnats with ADHD, so we get entire poems, not just snippets, recited by the young actors with full-throated ease. (THE SUNDAY TIMES) the chance to sit in the poet's own back

garden should be seized. [...] Veitch is ahead of the poetic curve here. (*the guardian*)

The lovers are tenderly brought to life by Andrew Dawson and Jennifer Taylor. A charming little two hander. (*TimeOut*) (筆者訳: アンドリュー・ダウソンとジェニファー・テイラーの演技が恋人達に優しく生命を与える。魅了される二人芝居)

A perfect English setting. A piece of perfect casting [...] the honesty and charm of the actors enhances and vitalises the simple beauty of the surroundings. On a balmy summer evening there can be no better way to spend the time. (*Ham&High*) (筆者訳: 完璧な英国での時代考証, 重要な配役, [...] 俳優たちの誠実で魅力あふれる演技が、ひとときに美しさを強調し, 生命を与える。爽やかな夏の夜を過ごすのにこの舞台ほど素晴らしいものはないだろう。)

an elegantly woven aggregate of his letters to fanny, his poems, and his critical reception. *TLS* (*THE TIMES LITERARY SUPPLEMENT*) (筆者訳: 上品に紡がれたキーツからファニーへの手紙, 詩, キーツの重要な成功)

<http://www.keatsinhampstead.com/>

- 28) ハンス・カロツァは、ドイツの詩人、小説家であり、開業医でもあった。1931年ゴットフリート・ケラー賞および1938年ゲーテ賞を受賞し、『現代におけるゲーテの影響』と題してゲーテ賞受賞記念講演を行っている。
- 29) 田中清光、吉野とみ子編『八木重吉: 未発表遺稿と回想』麦書房, 1971, 185p.
- 30) (1971年10月26日)「こよみ」欄「▼“魂の底から静かに流れ出るような詩”を書いた八木重吉(明治三十一年生れ)は、昭和二年のこの日神奈川県・茅ヶ崎市で死んだ。イギリスの詩人キーツに傾倒、内村鑑三の影響でクリスチャンになった。詩集に「秋の瞳」、宗教的感情がうかがえる「貧しき信徒」などある。最近東京都世田谷区代田の麦書房からキーツ、ブレイクの訳詩、関係者の回想をまとめた遺稿集がでた。」
- 31) 「世界名詩集―全26巻／バイロン キーツ」(1968年7月19日)「バイロン／マンフレッド／小川和夫訳／キーツ／レイミア、イザベラ、聖女アグネス祭の前夜、その他の詩集／大和資雄／出口泰生訳／9回配本第2巻一好評論発売中／偉大な魔術師マンフレッド伯は、とどのつまりの敗北を承知しながらも戦いをやめず地獄に呑みこまれる。そしてその瞬間にも助けを拒絶する。彼はすなわちバイロン自身である。他に「水の面にその名をとどめた」夭折の詩人キーツを併録。／菊判・定価600円／」の広告中に、キーツの墓碑銘が記されている。
- 32) 「これぞ幸福の手紙!／キーツの私信に八百万円の値」(1972年6月28日) 夕刊 記事内容は、「【ロンドン二十七日発=時事】十九世紀の英国詩人ジョン・キーツ自筆の手紙が二十七日ロンドンで競売に付され、一万一千ポンド(八百八十万円)で落札された。手紙の競売でこれだけの値がついたのは史上最高といわれる。手紙は一八一七年四月、ワイト島へ向かうキーツが兄弟たちに送ったもの。／キーツは英国人にとくに親しまれている詩人で、彼の自筆の手紙や詩はほとんど全部図書館や博物館の所有となっており、二十七日落札されたものはおそらく個人が所有する彼の手紙としては最後の一通とみられている。落札者はニューヨークのディーラー、ジョン・フレミング氏。」
- 33) 「アントニー・バージェス／相変わらずの健筆／新作「アバ・アバ」発表」(1977年6月17日)
- 34) 記事は、ローマを舞台とする二部作「アバ・アバ (Abba Abba)」は、第一部が1821年ローマで客死したロマン派詩人キーツが、晩年の数か月に、当時のイタリアの俗語詩人ジュゼッペ・ジャッキノ・ベッリと、もしもローマで出会っていたならという想定のもとに、対照的な理想主義的な詩人キーツと放蕩無頼の詩人ベッリとの交際を通して、もしもキーツがもっと長生きしていたならば、キーツ作品の作風がベッリからの影響を受けて違ったものになっただろうという内容である。実際、キーツ作品の中には「レイノルズ夫人の猫に」に軽妙な喜劇的感覚や言語遊戯に興ずる側面も見られたことから、キーツ読者にとっても関心のあるテーマであると考えられる。わが国でもキーツとイザベラ・ジョーンズ夫人をモチーフにした青山光二の小説『美よ永遠 (とわ) に』(新潮社, 1998年) が発表されている。
- 35) Walter Jackson Bate, *John Keats*. Cambridge, Mass.: Belknap Press of Harvard University Press, xvii, 732p.
- 36) 「一九六四年度のピューリツァー賞受賞者がこのほど、コロンビア大学の委員会から発表された。…「伝記部門はウォルター・ジャクソン・ベートの評伝『ジョン・キーツ』で、昨年十二月ハーバード大学出版部から出版された七三二ページの大冊である。ベートはさきにも「ジョン・キーツの文体の発展」「クラシックからロマンチックへ」などを刊行し、キーツ研究の権威者である。この書はキーツの二十六年間の短い生涯を、毎月、毎週、とき

には毎日の記録を追って忠実に究(きわ)めた。かつてない詳細な伝記であるのみならず、キーツの性格や精神、思想の展開をも、詩作や手紙類と実生活とを照合して、深い理解をもって実証してみせた労作である。たとえば、キーツは五百四分の三インチの小男だとか、これまで伝えられているリー・ハントとの晩年の不和とか、ファンニー・ブラウン嬢との失恋の真相などはいずれも誤りだ、と解釈したりしている。著者のキーツに対する多年の傾倒が結晶した、記念すべきまれな良書だと、出版当時から好評であった。…今回の受賞作品が、三作とも大学出版部の図書であることも、アメリカ出版界の動向を知るうえでおもしろい。」

- 37) 映画タイトル「ブライト・スター」は、キーツのソネット“Bright Star”に由来するものと考えられる。

恩田泰子「ブライト・スター／～いちばん美しい恋の詩～／英・豪」(2010年6月4日) キーツと恋人ファンニー・ブラウンを扱うジェーン・カンピオン監督の映画の紹介記事が写真入りで芸能面の映画欄掲載された。

元木崇「[シネマの世界]「ブライト・スター／～いちばん美しい恋の詩～」(2010年8月18日) 寄稿記事も掲載されている。

- 38) (恩田泰子)「[映画] ブライト・スター ～いちばん美しい恋の詩～」(2010年6月4日)、元木崇「[シネマの世界] ブライト・スター」(2010年8月10日)、配役は、キーツ役は、(ベン・ウィショー (Ben Whishaw)、ファンニー役はアビー・コーニッシュ (Abbie Cornish)、監督は、ジェーン・カンピオン (Jane Campion) 2009年制作。映画評論は、つぎの通り。Vanessa Thorpe “Art beat: Poetic justice for John Keats: The Hampstead romantic has a theatrical homecoming this summer– and also hits cinemas in the shape of Ben Whishaw” guardian.co.uk, Friday 17 July 2009 15.34 BST

<http://www.guardian.co.uk/culture/2009/jul/17/art-beat-poetic-john-keats>

- 39) 「朗読 CD の最新録音 10 タイトル、一挙に発売。／永遠に残したい／日本の詩歌大全集／6／20 発売…発売元：ポニーキャニオン／歌詞カード付」「広告欄」(2012年6月22日) の中に、名訳で聞く／世界名詩選／朗読柄本明。

※本文および注における、■等の記号は原文のまま引用した。